

# 小名浜ソーブ街を描いた 舞台公演が下北沢で公開

7月11〜16日、東京・下北沢の下北沢OFFOFFシアターで、劇団東京フェスティバル第10回公演『泡』が公開された。

実はこの舞台公演、いわき市小名浜のソーブランド街をモデルにした異色の物語だ。

小名浜で細々と経営を続けるソーブランド「鮫姫」。近所に住む常連客はサーブス時間外でも待合室に顔を出し、従業員や泡姫（ソーブ嬢）らと世間話を楽しむ。そんな地域にとって憩いの空間となっていた店舗を震災と原発事故が襲った。

「風俗店には融資できない」と地元の信用金庫から言われて落胆する店長、子どもへの影響を不安視する泡姫、漁に出られないことに悩む常連客の漁師、夜間外出禁止令が出て店に来られなくなった原発作業員……昨年3月以降、小名浜の人たちがさまざまな葛藤を抱えながら支え

合って生きていく姿がユーモアを交えて描かれる。きたむらけんじ

代表はテレビやラジオで活躍する放送作家で、脚本・演出をすべて1人でこなす。所属役者はゼロで、きたむら代表が公演ごとに舞台役者に出演交渉するという。何とも変わった劇団だが、どうして「小名浜ソーブ街」を舞台のテーマにしようと考えたのか。

「担当しているラジオ番組で震災



2012年7月11日(水)～16日(月祝)

舞台公演「泡」のポスター

1年を機に被災地取材することになり、大手マスコミとは違った視点にしたいと思っ、小名浜ソーブ街にスポットを当てたんです。そこで、ソーブ嬢は一度全員解雇になり、経営者が「再開するから戻って」と呼び掛けても（子どもへの放射線の影響を心配して）、県外から戻ってこない人が多いことや、漁に出られない漁師の厳しい現状を知りました。こうした一つひとつの話にドラマ性を感じ、ぜひ舞台のテーマにしたいと考えたのです」（きたむら代表）

劇中では、差し入れの品が「高木屋のチーズドック」だったり、登場人物が小名浜に進出予定の大型ショッピングセンター（本誌2月号参照）を懸念したりと、地元民ならニヤリとさせられるシーンも多い。何より驚かされるのは、登場人物が使う小名浜弁。「地元の人を読んだ台詞を録音して、役者に何回も練習してもらった」（きたむら代表）と言うだけあって全く違和感がない。細かい点にストレスを感じない分、物語にぐいぐい引き

込まれる。震災・原発事故をテーマにするのに関し、きたむら代表は次のような見解を示す。

「震災・原発事故に関する物語にしても報道にしても、（安全側・危険側）に極端に偏ったものが多いように感じるんです。生きている限り、嬉しいことや悲しいことはその都度あるのに、放射能汚染のことだけを抽出して『福島はすごく不幸だ』と言いつけるのは、僕は違うと思う。福島県にも普通の日常があるということとをマスコミなどが伝えていくことで視聴者の考え方も変わると思いますが、そういう意味では、この舞台公演（『泡』）も福島の現状を知らせるために継続していきたいですね」

こうした形で県内の現状を全国に広めていくことで、福島県に対する風評被害や偏見は無くなっていくのかもしれない。『泡』の舞台公演は一旦終了したが、きたむら代表は福島県をはじめとした全国での公演も検討しており、現在、200〜400人規模の劇場を探しているという。